

人虎傳と山月記

上尾, 龍介
九州大学教養部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/9808>

出版情報 : 中国文学論集. 4, pp.91-104, 1974-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

人虎傳と山月記

上尾龍介

中島敦は、世に広く知られることもなく、異才を抱いたまま三十三年の生涯を閉じたが、死の年となった昭和十七年「文学界」二月号に「山月記」を発表し、作家として立つ決意を固めて、八月、南洋庁を辞任し帰京したが、十二月、宿病に倒れたのであった。

山月記に描かれている人物は、詩人になることに執したあまり、遂に虎になって果てたのであるが、このような、人間が虎になるといふ形をとった物語は、中島が下敷きとした物語をはじめとして、中国には数多く存在する。このような、多くの伝奇的物語のうちのどの話の中島の山月記の下敷きとなっているのかといふことを掴むために、聊かの作業を試みたい。

太平廣記に収録される物語りのうち、人間が虎になる話を拾い集めてその幾つかを次に掲げてみることにする。

太平廣記四二九には「張逢」と題する話が収録されている。話は次の如くである。

南陽の張逢という男が旅に出て福州福唐県にやって来た。時は夕暮れて山は夕もやにかすんでいた。辺りの名勝を尋ね

歩くうちずいぶん遠くまで来ていることに気づいた。辺りに一面に美しい草が生え、小さな林があった。そこで木の枝に着物を掛け草に横たわって転がると、快適でさながら獣がころげ廻っているかのような感があった。立とうとするとすでに虎になっていて、爪も牙も鋭く無敵であった。山野をこえていなすまのように走った。夜になって空腹を覚え村に入り、ちようど通りかかった福州の録事鄭審なる者を捉えた。これをくわえて山上に至り腸と髪だけ残して食いつくした。しかし、ひとりだけになった時、ふと思った。「自分は、もと人間であったのに何を楽しんで虎などになり、このような深山に居るのか。虎になった最初の場所を探してもとの人間に戻ろう」そこで探し廻って日暮になり漸くそこに至った。着物は枝にかかっており、草はもとのようであった。そこで身を転がして立ち上ると人間にかえった。家に帰ると下僕が驚いて尋ねたので「山中に寺院を見つけ、仏教の話などして時を過してしまった。」と語った。ある人は「今朝虎が出て福州の鄭録事が食われた。あなたを心配したが無事でよかつ

た。」と言った。後日彼が淮陽に旅した時、宴席でこの話をすると、たまたま鄭録事の息子がおり、仇を討たれそうになつたが、のがれ、後変名して難を避けた。

以上のような話であるが、この話には虎になつた原因が全くなく、言わば偶然に何となくなつてしまつてゐるし、また人間に戻りたくなると、簡単に元の人間に戻つてゐる。ここには聊かの人間的な陰翳も認められず虎になるという怪奇性だけが拾ひ上げられるだけである。強いて言えば、息子に出あつて仇を討たれそうになつて逃げる所だけが人間臭いぐらいのことである。

卷四二六に「郴州佐史」という話が収録されている。話は次のごとくである。

郴州佐史が病んで虎となり、兄嫁を食おうとしたので、人が捉えてみるとそれは佐史であつた。まだ形は完全には人間に戻つておらず、尻には虎の尾があつた。そこで数十日間木にしばりつけておいた所、やっと人間にもどつた。長史がそのわけを訊ねた所、次のような答えであつた。「多くの虎たちがあつた所にいつも餌を持寄つて集つてゐたが、自分は虎の仲間に加つたばかりで、よその人を捉えることができなかった。そこで兄よめを捉えて持寄ろうとして、つかまつてしまつたのだ、もう虎にはなれぬけれども、声だけは、今でも出せる。」と答えた。そして虎の声を出すすと、人々は皆震え、屋根瓦は落ちた。

以上のような話であるが、これも単なる怪奇譚の域を出ていない。ただ虎になつた原因が、病のためという点が、前の話と異なつてゐる。

卷四二六に「師道宜」という話が収録されている。話は次の如くである。

晋の太元元年、安陸県の師道宜は二十二才。幼時から頭がよかつたが、発狂して虎になり、やたらと人を食つた。或日、桑の木の上で葉を摘んでいた女を食ひ、そのかんざしや腕輪を岩陰にかくして置いた。のち人間に返つて、その場所に行つてそれを取つた。その後、家に帰り、出仕して殿中侍御史となつたが、ある晩、同僚と話にふけていて話題が天地の怪異のことに及んだ時、彼は、自分が虎であつた時食つた人間の姓名などを語つた。同席した人の中に、父母兄弟を食われた者があり、捉えて役所に突き出したので遂に建康の獄中で餓死した。

以上のような話である。この話では発狂して虎になつてゐる。病んで虎になつた、という話と同じで、発狂した原因にまでは及んでいない。ただ、食われた人間の身内の者から仇を討たれろという点は「張逢」の話と同じである。

卷四三二に「南陽士人」という話が収録されている。話は次の如くである。

一人の男が南陽山に住んでいた。ある時熱病にかかり十日もなおらなかつた。庭で休んでゐると、門を叩く音がきこえた。それは夢の中のことのようにあつた。家の者は誰一人その音は聞かなかつた。この男が恍惚とした気分と思わず起き上ると、門の外から一人の人が言つた「ここに文字を書いた紙がある。君は虎になるのだぞ」と。彼は驚いて手をのばして受取つた。相手の手には、虎の爪が生えていた。翌朝見ると、

紙はまだそこに在った。彼は不思議に思った。病はいよいよひどくなつた。或日、散歩に出て谷川にそつて歩き、ふと水に写つた自分を見ると既に虎になつてゐた。家に帰れば妻子が驚くだろうと思ひ、山に入った。山に入って二日目、飢えを感じた。水中のおたまじやくしを見つて、虎は常に泥を食うものだと聞いていたのを思い出し、遂にすくつてそれを食べた。やがて兎を食へた。昼は草中に潜み夜は食を求めて歩いた。或時、樹上に桑を摘む女を見つて、虎は人を食うのだということ思い出して食つた。或る夕暮、薪を担いだ人が通つたので、捕えようとした所、後から「捕えるなよ」と声が出た。男はやはり家のことを思つていたので、そのことを老人に打ちあけた。老人は「もとに戻りたければ戻れるが、あの薪を担いだ者を殺せば永久に戻れなくなる。だが明日お前が王評事を食へば人間に戻れるぞ」と言つて老人は消えた。翌日の夕暮れ官路に近い草の中に待つてゐると、「王評事がやつて来たぞ」といふ声が空から聞えてきた。見ると従者たちはずつと離れた所を歩いていたのでおそいかかつて、食つた。食ひ終ると心は醒めたよゝな氣持になり帰ろうと思つた。谷川に姿を写してみると既に人間になつてゐた。家に帰ると家人は驚き怪しんだ。既に七、八カ月は経つてゐたからである。酔つた人のように、ろれつが廻らなかつたが、やがてよくなつた。数年のち、ある県の県令の宴席で、彼がこの話をすると、県令は驚いて、彼を殺してしまつた。県令は王評事の息子であつたのだ。

以上のような話である。これはやはり病氣にかかつて虎になるのだから、熱にうかされた状態の中で奇怪な者から書状を受け取つてやがて虎になる。というように、虎に変わる過程が細かく述べられてゐる。飢えて科斗を食う時も、人を食う時も、ためらいを見せ、ことさらに、虎だからと断つて食つてゐる。また、話の中心になつてゐる王評事を食う時も老人の示唆によつてという設定をして食つてゐる。このような点は他の話にはない。最後に仇を討たれてしまふ点は、他の話と同じ。この話は、他の話より多少手がこんではいるが、結局は単なる怪奇的因果話にすぎない。

卷四三二には「范端」といふ話が収録されている。話は次の如くである。

涪陵の里正の范端なる者が、虎になり村々はそのため苦しみ、遂に県令に申し出て「日頃、ほかの虎を連れて村に入り牛畜を食います」と訴えた。県令は「世の中にそんなバカな話はないそれは范を陥れるための言葉だ」と言つて范端を呼んで訊ねた。范端は「県令のおっしゃる通りです」と答えた。後日、虎が倉庫に入り肉を食つたので村人がこれを困んだが、虎は逃げた。村の長老は、又訴えた。県令が再び范端を問いつめると、端は次のように話した。「自分は日頃肉が食べたいと思つてゐたが手に入らぬので、隣家の豚を捉えて食べてみた。それ以来人間をみると、これをねらつた。毎晩仲間を求めらうと二匹の虎に出会つた。そこで持つてゐる物を分け合つて食べた。その時、体が変化してゐることは知らなかつたが、氣分は酔つてゐるようであつた。」と語つた。数日経つて

虎が村の外で吼えた。范端は、母に別れて泣いて去って行った。数日後、村人が三匹の虎を見たがその中の一匹は後の左足に靴をはいていた。と告げた。母は山野を探し廻りやっと見付けた。二匹の虎が走り去る時、靴をはいた方の虎は立止まって体を伏せたのでその靴をぬがせると、足は人間の足であつた。その後、村人はしばしばその虎を見た。ある時、「范里正」と呼びかけると虎たちは驚いて逃げたが、一匹は振り返って、悲しげな顔をしてこちらを見た。それ以後、ゆくえはわからない。

以上のような話である。これは、肉を食べたいあまり、人を食つて虎になつたのである。この場合は、虎になつたり、人に戻つたりして、同一人が奇怪な二重生活をするのであるが、母子の愛情がからんで、哀れである。語られている話は、至つて簡単なものながらこゝには抜き難い人間の問題が含まれている。

卷四二七には「李徴」という話が収録されている。この話は、隴西の李徴という進士が虎になり、友人の監察御史表憐と山中で出会い、昔のことを語り、妻子の今後を托して別れるという話で、中島敦の「山月記」と同じ話である。この話は、前に掲げた人虎説話の何れのものよりも構成が整つており、近代人の鑑賞にたえうる最も人間臭い話である。而も悲劇性さえ帯びている。人が虎になるといふ話の中では、最もすぐれた整つた物語りである。

ここで話の筋を殆ど同じくする中島の「山月記」が依拠した物語りは、大平広記のこの「李徴」の話ではあるまいかと考えることは、辿られ易い筋道であるけれども、このことには、今少

しの考察が加えられねばならない。何故ならば、広記の「李徴」の話には詩が入っていないにもかかわらず、「山月記」には、次のような七言律詩が一首入っているのである。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 當時聲跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘輶氣勢豪

此夕溪山對明月 不成長嘯但成嗥

まるで、中島の山月記をそのまま圧縮して八句の詩に書き改めたような詩であるが、この詩はどこから出たのであろうか。ここで全唐詩を調べる必要が生じる。

全唐詩九百巻を検索して行くと巻七六九に鄭軌という人物があらわれ、詩が一首録されているが、その名の下に註して、「以下無世次爵里可考」と記されている。この巻以下に収められた作品は、實在性の薄い人によつて作られた詩であるために、奇怪な詩などが多く（たとえば、夜半、亡妻に逢つてかわした詩、など）従つて、作爲的な奇怪な物語りとつながり易い性質の詩が多いのである。このことから見ると、太平広記に収録されている物語りと、全唐詩巻七六九以下に収録されている詩とは或いは深くかわり合っているのではないかという予測が立つのであるが、それは、まさしくその通りなのである。而も、全唐詩のその部分の作品には、その殆どにわたつて短文の序が附けられており、その序の文は、例外をのぞいて、^①殆どのものが太平広記の話の要約である。以下いくつかの例をあげる。

○全唐詩七七〇に唐暄の詩（序文なし）があり、また全唐詩八六六に「唐暄妻張氏」の詩および九十字の序文があるが、

この詩と序文とは太平広記三三二の「唐暹(通幽記)の物語と深く関わっている。

○全唐詩八六六に「朱均」の詩および一四四字の序文があるが、この詩と序文とは、太平広記三三六「常夷」(廣異記)と深く関わっている。

。全唐詩八六六の「韋璜」の詩および七四字の序文は、太平広記三三七「韋璜」(廣異記)と深くかかわっている。

。全唐詩八六五の「書生」の詩および六〇字の序文は、太平広記三三七「元載」(廣異記)と深くかかわっている。

。全唐詩八六五「陸憑」の詩および八九字の序文は、太平広記三三九「陸憑」(通幽記)と深くかかわっている。

。全唐詩八六五「韓弁」の詩および一〇六字の序文は、太平広記三四〇「韓弁」(河東記)と深くかかわっている。

。全唐詩七七〇「安鳳」の詩並びに、全唐詩八六六「徐侃」の詩およびこの詩に附せられた六三字の序文は、太平広記三四四「安鳳」(瀟湘録)と深くかかわっている。

。全唐詩八六五「壤陽旅殯拳人」の詩および七三字の序文は、太平広記三四四「壤陽選人」(西陽雜俎)と深くかかわっている。

。全唐詩八六六「商山客死書生」の詩および一〇八字の序文は、太平広記三四四「祖價」(会昌解頤録)と深くかかわっている。

。全唐詩八六七「長鬚国附馬詠妻」の詩および三四四字の序文は、太平広記四六九「長鬚国」と深くかかわっている。

。全唐詩八六六「與李章武贈答詩」および一九二字の序文は、

太平広記三四〇「李章武」(李景亮撰)と深くかかわっている。

凡そ右のような具合である。このような、多くの例において、全唐詩の「詩の序」が太平広記の物語りの要約となっている以上、全唐詩八六七に収められた「李微詩」の序と太平広記の物語りとが、一方は李微と李巖の話、他方は李微と袁修の話、という具合に、登場人物の名を異にしているというだけの理由で別々の物語りであるとは考えにくい。全唐詩に収められた「序」は、一〇七字の短いものであり、以下の如くである。

微は宗室の子、號略に家す。博学にして善く文を属す、天宝十五載、進士の第に登る、後、汝墳の逆旅に於て狂疾を被り、夜、走りて出で変じて虎と為る、同年、李巖、監察御史を以て嶺南に使す。商於の界に於て虎突出し、擒えて之を食はんと欲す、忽ち人言を作して曰く、幾んど我が故人を傷つけんとすと、巖、其の音を聆くに、微に似たり、遂に之と言ふ。因つて具さに変化の由を述べ、其の妻子を賑恤せんことを託し、口に文二十篇を誦し其れを世に傳はらしむ。復た詩を為りて云ふ

偶因狂疾成殊類

災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵

當時聲跡共相高

我為異物蓬茅下

君已乘軺氣勢豪

此夕溪山對名月

不成長嘯但成嘆

以上のごとくである。この文が、中島の山月記と同一の筋書きであることは一読して理解される所であるし、詩は山月記のそれと同じものである。同様に太平広記の「李徴」の物語りの筋書きとも同一である。ただ広記には、詩を収めていない。

ここで、全唐詩と広記との関係が緊密であることが理解されたい。山月記は、或いはこの両者をつき合せて一篇の詩を含む物語としたのではないか、と考えることも成り立ち易い。しかし、このままでは、登場人物の名が全く異なっている点の説明がつかない。

そこで、我々は視点を、明・清の叢書類に移さねばならない。明の陸楫の編する古今説海・説淵五十二には人虎傳と題する物語りが収められており、清の陳蓮唐の編する唐代叢書（唐人説會）・六集にも、人虎傳と題する物語りが収められている。

この二作は、約二十個所に、一字乃至二字の、字句の異同が見られるだけで、全文にわたって全く同一である。作品の総字数も、前者が二〇二四字、後者が二〇二二字となっており、前者の冒頭の部分が三字多くなっているのであるが、この三字は物語の展開の上で、聊かも特別の意味を持たぬ文字である。しかしながら、この二作の間の大きな相違点として、登場人物の姓名の違いを上げねばならない。即ち古今説海の方は、隴西の李徴と、監察御史・陳郡の李巖との物語りであるが、唐代叢書の方は、隴西の李徴と、監察御史・陳郡の袁修との物語りとなっている。

尤も、この二つの人虎伝が、全唐詩の「序文」及び太平広記

の「李徴」と題する物語の双方と、同じ筋立てを持った物語であること勿論である。

所で、この登場人物の姓名の異同は、全唐詩と太平広記を比較した場合にも認められた事柄である。つまり整理すれば次のようになる。

Ⓐ「李徴」と「李巖」の物語（全唐詩・古今説海）

Ⓑ「李徴」と「袁修」の物語（太平廣記・唐代叢書）

となる。つまり登場人物の姓名から推して考えれば、山月記が依拠したであろうと考えられるこの物語は、その版本の流伝の系統を、右のような、Ⓐ、Ⓑ、二系統に分けて考えるのが自然であろうと思われる。このように見えてくると、中島の山月記は「李徴」と「袁修」の物語であるから、一応Ⓒ系統として考えられるだろう。

ところで同じB系統の太平廣記所収の李徴と題する物語は、唐代叢書所収の「人虎傳」に較べて、その文の長さにおいて、約半分の一三八六字である。

廣記の物語に述べられていない部分を人虎伝から拾うと次のごとくである。

①且つ修始め君と場屋を同じうすること十余年、情好歎すること甚しく他友に愈れり意はざりき吾まず仕路に登らんとは、君亦繼いで科選に捷つ、瞬間言笑時を経ること頗る久し、傾風結想、渴して飲を待つが如し、幸に出でて使するに因り此に君に遇ふを得たり、而るに乃ち自ら草中に匿るるは豈故人嚙昔の意ならんやと、虎曰く吾已に異類となる使君吾が形を見れば、即ち且に畏怖して之を悪まん、何ぞ

嚙昔を之れ念ふにいとまあらんや、然りと雖も、君遽に去るなく、少しく款曲を尽すを得ば、乃ち我の幸なりと、慘曰く、われもと兄を以て故人に事ふ、願くは拜礼を展べんと、乃ち再拜す。

⑨夜戸外に吾が名を呼ぶ者あるを聞く、遂に声に応じて出て、心甚だ之を異とす。既にして溪に臨みて影を照せば已に虎と成れり、悲慟すること良久し然れども尚ほ生物を攫みて食ふに忍びず、既に久しく飢えて忍ぶべからず、遂に山中の鹿豕獐兔を取りて食に充つ、又久しくして諸獸皆遠く避けて得る所なし、飢益甚し、一日婦人あり山下より過ぐ、時正に餓迫る、徘徊すること数四、自ら禁ずる能はず遂に取りて食ふ殊に甘美なるを覚ゆ、今其の首飾尚ほ巖石の下に在り、是れより。

⑩此地に居りてより歳月の多少を知らず、ただ草木の栄枯を見るのみ、近日絶えて過客なく、久しく飢えて堪え難し、不幸にして、故人に唐突し、慙惶すること殊に甚しと、慘曰く、君久しく飢うれば某に余馬一疋あり、留めて以て贈となさば如何と、虎曰く、吾が故人の俊乗を食ふは、何ぞ吾が故人を傷くるに異らんや、願くは此を反さんと、慘曰く、食籃中に羊肉数斤あり、留めて以て贈となさば可ならんかと、曰く、吾、方に故人と旧を道ふ、未だ食ふに暇あらず、君去るとき則ち之を留めよと、

⑪既にして又曰く、吾詩一篇を為らんと欲す、蓋し吾が外異なりと雖も、中異なる所なきを表せんと欲す。亦以て吾が懷を道ひて吾が憤を摠べんと欲するなりと、慘復た吏に命

じ筆を以て之に授けしむ、詩に曰く
偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃
今日爪牙誰敢敵 當時聲跡共相高
我為異物蓬茅下 君已乘韜氣勢豪

此夕溪山對明月 不成長嘯但成嘯

と。慘之を覽て驚いて曰く、君の才行我之を知れり。而も君の此に至れるは、君平生自ら恨むあるなきを得んやと。虎曰く、二儀の物を造る、固より親疎厚薄の間なし、其の遭う所の時、遭う所の數の若きは、吾又知らざるなり。噫顔子の不幸再有の斯疾、尼父嘗て之を歎ぜり。若し其自ら恨む所を反求せば、則ち吾亦之あり、定めて此に因るを知らざらんや、吾故人に遇ふ、則ち自ら匿す所なし、吾嘗て之を記す。南陽の郊外に於て嘗て一孀婦に私す、其家竊に之を知り、常に我を寄せんとの心あり、孀婦是より再び合ふを得ず、吾因つて風に乗じて火を縱ち一家數人盡く之を禁殺して去る、此を恨となすのみと、虎又曰く、使して回る日、幸に道を他郡に取れ、再び此途に遊ぶなかれ、吾今日尚ほ悟るも一日都て酔はば則ち君此を過ぐるも、吾既に省せず、將に足下を齒牙の間に碎かんとす、終に士林の笑と成らん、此吾が切祝なり、君前み去ること百余歩、小山に上り下視せば盡く見ん、此に將に君をして我を見しめんとす。勇を矜らんと欲するにあらざり、君をして見て復た再び此を過ぎざらしめんとなり、則ち吾故人を待つ所の薄からざるを知らんと、復た曰く君都に遷り吾が友人妻子を見るも、慎んで今日の事を言ふながれ、吾れ久しく使旆を留め

王程を稽滞せんことを恐る、願くは子と訣れんと、別を叙すること甚だ久し、修即ち再拝して馬に上り草茅中を回視すれば、悲泣聞くに忍びざる所なり、修亦大いに働き行くこと数里、嶺に登りて之を看れば、則ち虎林中より躍り出て咆哮し、巖谷皆震ふ。

以上、書き出した五つの文は、太平廣記に見られぬ部分であるが、これが、後世の加筆になる部分か、或いは、散佚した部分であるのか今は確かめ得ないが、太平廣記の物語「李徴」が短いなりに、それとして一応まとまった話となっていることから考えれば、人虎伝の方は、或は後世の加筆になるものであろうかと考えられる。

このような観点に立つて再読すると、人虎傳には、話の筋の展開に不自然な点が見られるように思われる。

李徴が虎になつた原因として太平廣記の「李徴」においては、次のような理由が示される。

徴、性疎逸、才を恃んで倨傲なり。跡を卑僚に屈する能はず、嘗て鬱々として樂しまず、同舎の会既に酣なる毎に顧みて其の群官に謂つて曰く、生は乃ち君等と伍を為さんとやと。其の寮佐咸な之を嫉む。謝秩に及び、則ち退き、帰りて門を閉じ、人と通ぜざること歳余に近し。後衣食に迫られ、乃ち東のかた呉楚の間に遊び、以て郡国の長吏に干む西のかた虢略に帰り未だ至らざるとき、汝墳の逆旅の中に舍し、忽ち疾を被りて発狂す。…中略…妻孥を念ひ、朋友を思はざるに非ざれども、直だ行ひの神祇に負けるを以て、一日化して異獣となる。人に覩ずるあり、故に分として見

えず、嗟乎、我と君とは同年に登第し交契素より厚し、君は今日天憲を執り親友に輝かす。而も我は身を林藪に匿し永く人寰を去る。躍りて天を呼び俛して地に泣くも身毀れて用ひられず。是れ果して命なるかと。因つて呼吟咨嗟し殆んど自ら勝えず、遂に泣く。

となつている。性狷介にして人を容れず、遂に高官になり得ず虎となつた男の嘆きである。これは唐代知識人に共通の願望と嘆きであつた。これを中島の山月記は、次のように表現している。

隴西の李徴は博学才穎…性狷介、自ら恃む所すこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山虢略に帰臥し、人と交わりを絶つてひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし文名は容易に上がらず、生活は日を追うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥に駆られて来た。このころからその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々として、かつて進士に登第したころの豊類の美少年の俤は、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず妻子の衣食のために節を屈して、ふたたび東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになつた。一方これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩はすではるか高位に進み、彼が昔、鈍物として歯牙にもかけなかつたその連中の下命を拜さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難

くない。彼は快々として樂しまず、狂悖の性はいよいよ抑えがたくなつた。一年の後公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寢床から起き上がり、何かわけのわからぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻つて来なかつた。付近の山野を搜索しても、何の手がかりもない。その後李徴がどうなつたかを知る者は誰もなかつた。……中略……己の珠なるを半ば信するがゆえに、碌々として瓦に伍することもできなかつた。己はしだいに、世を離れ、人と遠ざかり、憤悶と斬志とによつて、ますます己の内なる自尊心を飼ふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獸使であり、その猛獸に当たるのが、各人の性情だといふ、己の場合、この尊大な羞恥心が猛獸だつた。虎だつたのだ。これが己を損い妻子を苦しめ、友人を傷つけ、はては己の外形をかくのごとく内心にふさわしいものに変えてしまつたのだ。……中略……虎となり果てた今、己はようやくそれに気がついた。それを思うと、己は今も胸をやかれるような悔いを感じる。己にはもはや人間としての生活はできない。今己が頭の中で、どんな優れた詩を作つたに似たところで、どういふ手段で発表できよう。

唐代の知識人の意識のあり方としては、官僚として名を成したといふのが最も普通な生涯の願望であつたと見てもよいと思われる。そのゆえにこそ、才能ある多くの知識人たちは、しばしば自らの「不遇」の意識を強く抱いたのであり、それは詩に托されて歌われたのもあつた。唐代の小説が、しばしば温

巻として用いられたと考えられている点から見ても、太平廣記の「李徴」が、そのような意識（願望）を持つた作者の手によつて作られたことも、容易に推測されるのであり、それを中島は置きかえて芸術に魂を奪われたものの深い嘆きを主題とする作品として描いている。しかし、そのいづれにおいても、人生の一つの課題に執つてそれに生涯をかけたものの切実な感情を述べ、その故にこそ、虎にまでならねばならぬ悲しみを言つてゐるのである。

ところが「人虎傳」においては、話が少し違つてくる。といふのは、前述の太平廣記の「李徴」と中島の「山月記」が、主人公李徴の心を狂わせ、そして虎にまで身を落さしめた理由として述べた事柄は、そのまま廣記の文と全く同じ文章で記述されてゐるのであるが、その、主人公が虎となつた理由を後段になつて、更にもう一つ付け加えてゐるのである。それは次のようない節である。

吾、故人に遇ふ。即ち自ら匿す所なし、吾嘗て之を記す。南陽の郊外に於て嘗て一婦人に私す。その家竊かに之を知り、常に我を害せんとの心あり。婦人これより再び合ふを得ず、吾、因つて風に乗じて火を縦ち一家数人尽く之を焚殺して去る此を恨となすのみと。

一人の寡婦との密通が発覚して、人を殺したといふことを挙げ、それで虎になつてしまつたのだと述べてゐるのである。つまり、人虎傳では虎になつた理由を一つ挙げてゐることになる。この二つの理由といふのはそれぞれ全く違った理由なのであるが、人虎傳の作者（廣記の「李徴」の物語に対する後世の加

筆者か、は敢てこれを書き加えているのである。しかしここで見逃されてはならぬ重要なことは、後の方の理由を追加することによって、前の方の理由は、理由としての存在の明瞭さが失われてしまっているということである。後者の理由が具体的にあり、通俗的、庶民的であるのに対し、前者の理由は、抽象的、形而上的であり、より高い次元の精神的な問題であるために、具体性を持たぬからであろうと思われる。本論の冒頭に並べた太平廣記所収の幾つかの人虎説話は、その多くが荒唐無稽な単なる因果譚であつたが、太平廣記の「李徴」はそうではない、より多く唐代知識人の精神の問題にかかわる物語であつた。しかしこの「李徴」が約二倍の長さの「人虎伝」になりかわる時、それはより平俗な因果譚に作りかえられているのである。人虎伝の筆者（加筆者か）は、より深く精神の問題にかかわる前者の理由を、つまり、唐代知識人の生涯の悲願でさえあつた官僚としての栄達というものを、虎になつてしまったことによつて断ち切られるという内面的な悲劇性を、敢て捨て去つて、後者の理由をことさらに添加したが、人虎傳の作者のその取捨選択の眼は、今日の基準からすれば、悲劇性を稀薄にしていると見られるのである。それは寡婦と通じ更には殺人まで行なうという低次元の問題にすりかえられているからであり、このような、人間の個人的理性の範囲内で生じた、愚劣な、世俗的問題の持つ悲劇的性情の薄弱さは、逆にいえば、痴呆的な滑稽さをさえ感じさせかねないのである。人虎傳の作者（加筆者）は、唐代知識人の悲劇として描かれていた「李徴」の物語の高さを、通俗的な単なる因果譚にまで引き下してしまつていたのである。

しかし、物語の制作における、このような安易な取扱いは、古小説一般に見られるところであり、当時の普通の読者には、このようなわかりやすい巷間の瑣事を取扱つた物語の方が、よりなじまれ易いものであつただろうことも想像される。

しかし中島敦は、一般的に納得されやすい（なじまれやすい）後者の理由を敢て捨て、前者の理由に立ち戻つたのであつた。そして立戻つたのみでなく、より近代的なより悲劇的な一芸術家という存在に不可避免的な、その心情にかかわる問題の悲痛さを、更にそこに添加したのであつた。詩人として後世に名を残したい。という、全く内面的な理由によつて、また決して逃れることのできない（もしそれができるとすれば、それは死が訪れる時であろう）理由によつて、李徴は癡狂し、虎になるのである。だが、虎になり果ててもなお、その嘆きは決して消えることはないのである。これは、理性の手による処理の範囲を超えた本質的な近代人の悲劇である。

このような中島の眼は「人虎傳」に含まれる夾雜物を随所に排除して物語を文学的に純化している。たとへば、さきに述べた寡婦の話もそうであるし、また、虎になつた李徴が自作の詩を述べた時、袁修はそれを聞き驚いて「君の才能が自分にはよくわかつた。しかし君は虎になつていて（もう官僚にはなれぬ）さぞ残念であろう」という意味のことをいつているが、それを中島は取らず、さきに述べたように、詩人の嘆きに置きかえてるのである。また主人公が虎になつた後、彼の下僕は、その乗馬と衣囊を悉く持つて逃げた、というくだりが再度にわたつて述べられているが、これも中島は取らない。また李徴と袁修

の会話の中で「君が空腹ならば、自分の馬を一匹やろう。それに籃の中に羊肉があるからそれもやろう」「いや、今は食う暇がないから、あとで置いていってくれ」というやりとりがあるが、⁵それも中島は除いている。李徴の友情厚い友であった袁修は末尾のところ、兵部侍郎にのぼったとあるが、これも中島は除いている。

これらの話柄は、何れも至って現実的な、形而下的なものばかりであり、悲劇的な要素を全く欠いている。そしてどこか滑稽でさえある。

これらの話柄のうち、下僕の持ち逃げの話だけは、人虎傳と廣記の双方に出ているが、この部分以外は、人虎傳のみに書かれていて太平廣記の「李徴」には書かれていない。それから見ると、中島は、「人虎傳」のみに述べられている部分の多くはとらなかつたことになるのである。それでは中島は、やはり大平廣記の「李徴」に依つたのではないかという疑問が、再び抬頭するのであるが、それは次のことによつて否定されねばならない。即ち

①道に汝墳に次り忽ち疾に墜りて發狂し、夜、戸外に吾が名を呼ぶ者あるを聞く、遂に声に応じて出で：(両・人虎伝) 汝水のほとりに泊つた夜のこと、一睡してから、ふと眼をさますと、戸外で誰かがわが名を呼んでいる。声に応じて外に出てみると、声は闇の中からしきりに自分を招く、覚えず自分は声を追うて走りだした。(中島・山月記)

②既にして溪に臨みて影を照せば已に虎と成れり(両・人虎伝)

谷川に臨んで姿を映してみると、すでに虎となつていた。

(中島・山月記)

③修亦大いに働き行くこと数里、嶺に登りて之を看れば、即ち虎林中より躍り出でて咆哮し、巖谷皆震う(両・人虎伝) 一行が丘の上についた時、彼らは言われたとおりに振り返つて先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、すでに白く光を失つた月を仰いで二声三声咆哮したかと思うと、またもとの叢に躍り入つて、ふたたびその姿を見なかつた。(中島・山月記)

右に掲げた三ヶ所は、何れも、両方の人虎伝に記されており、同時に中島の山月記にも取り入れられているが、太平廣記の「李徴」には、この三ヶ所はない。而も、この三ヶ所は、そのうちの二個所が筋の展開において、更に他の一個所は、一篇の結びという極めて重要な点において、作品に大きな役割を果しているのである。

この点から見て、中島が依拠していたのは、太平廣記ではなく、人虎伝であることが、たしかな手ごたえをもつて知られるのである。

それでは、二つの人虎伝のうち、中島は、果して何れに依つているのか。という問題が最後に残る。

この最終的な疑問については、次の証拠を示すことによつて答えることができる。

物語りの後半に入つて虎が袁修に向つて、自分の妻子のこと

を訴えるくだりがあるが、それは、次のようになっている。

① 「古今説海」所収の人虎伝

吾妻努尚在號怨豈知我化為異類乎君自南回為齋書訪吾妻子
但云我已死無言今日事（吾が妻努尚は在りて號怨し、豈に
我が化して……………）

② 「唐代叢書」所収の人虎伝

吾妻努尚在號略豈知我化為異類乎君自南回為齋書訪吾妻子
但云我已死無言今日事（吾が妻努尚は號略に在り豈に我が
化して……………）

③ 中島敦の山月記

もう一つ頼みがある、それはわが妻子のことだ。彼らはま
だ號略にいる。もとより己の運命については知るはずがな
い。が南から帰つたら、己はすでに死んだと彼らに告げ
てもらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさな
いでほしい。

右の三例によつて見ると、二つの人虎傳は最初の部分の號略
と號怨の二字を異にしている。號と號とが、書き誤られ易いこ
とは、一見して理解されるが、略と怨とは活字で見ると限り字形
は殆ど似ていない。しかし、これを草体で早書きすると、似通
つていて、見誤られ易い。この二字が、書写本の流伝の過程に
おいて、或いは誤つて書き写されたかも知れぬことは推察に難
くない所である。

ところで、山月記の右に挙げた文章をみると、殆んど原文の
口語による直訳であることがわかる。山月記には、しばしば原
文の直訳的なところがみられるが、この部分も、その例の一つ

である。この、まるで敷き写しをしたような部分において、二
つの人虎傳のうちの何れかにそっくりであるということは、ま
さしくその原文を下敷きとした直訳的表現と見做してもよいで
あろう。この個所では②の方とそっくりであるから、山月記は、
唐代叢書所収の人虎伝に依拠しているということが言える。

次にもう一例挙げる。これは、始めの部分で袁修が山を越え
ようとするくだりである。

① 「古今説海」所収の人虎伝

明年陳郡李巖以監察御史奉詔使嶺南乘傳至商於界晨將去其
驛吏白曰道有虎暴而食人故途於此者非晝莫敢進今尚早願且
駐車

② 「唐代叢書」所収の人虎伝

明年陳郡袁修以監察御史奉詔使嶺南乘傳至商於界晨將去其
驛吏白曰道有虎暴而食人故途於此者非晝莫敢進今尚早願且
駐車

③ 中島敦の山月記

翌年、監察御史、陳郡の袁修という者、勅命を奉じて嶺南
に使いし、途に商於の地に宿つた。次の朝まだ暗いうちに
出発しようとしたところ、驛吏が言うことに、これから先
の道に人喰虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ通れない。
今はまだ朝が早いから、今少し待たれたがよろしいでし
うと。

右の文も、①②全く同文であり、ただ一個所袁修と李巖という
文字が異なっている。③の中島の文は、全く原文の直訳であり、
その文中の人名は、陳郡の袁修となっている。

全く、もとの文の直訳の形になっている右の二つの個所に
いて、中島の文は何れも、唐代叢書の人虎傳の文に則っている
ことは明らかである。これを以て見れば、中島の依拠した人虎
傳は、古今説海の方ではなく、唐代叢書所収の人虎傳であると
いうことが、明確になるのである。

中島が、太平広記および全唐詩を、創作に当って参照したか
否かを知る資料は、今はないが、少なくとも人虎傳に関する限
りは、唐代叢書に拠ったのであつて古今説海には拠っていない
ことは、以上の論述によつて知られるのである。

この物語には、先にも述べた通り④⑤二系統があり、⑥の系
統は、「李徴」と「袁修」を登場人物とした物語であり、この
系統には、太平広記と唐代叢書の物語りが、その流れに立つも
のとして数えられたが、この系統の物語は、更に流れて日本に
至り、中島敦の手に拾い上げられて、異色の近代悲劇として再
生する運命を担っていたのである。

なお、余説ながら、友情厚き袁修は、物語中では兵部侍郎に
昇つたことになっているがこの袁修なる人物については、以下
に挙げるような記録を見ることができらる。

太平広記四九六は、唐国史補より引いた次の文を収めている。

袁修之破袁眺、擒其偽公卿數十人、州県大梟桎梏、謂必生
致闕下、修日此悉百姓何足煩人乃遣管醫逐之。

また全唐詩二五二は、袁修なる者の詩を二首収録し、次のよう
な序を付している。

袁修、官御史中丞、兵部侍郎、詩二首。⁶⁾

しかし、この二首の詩からは、虎になつた李徴と関係ある人物

であると思われる何ものも見られない。この袁修も人虎傳の袁
修と同じく兵部侍郎に昇っている。

人虎傳の袁修と、こゝにあげた実在の二人の表修とが、同一
人物であるかどうか。そしてこのような関係がしばしば見られ
る場合、そこに何らかの意味が隠されているのかどうか。

このような所に、或いは唐代小説の扉を開く鍵が秘められて
いるのかも知れない。

註

(1) たとえば、全唐詩卷八六五「虎丘山石壁鬼」の詩の序と、太平
広記卷三三八の「武丘寺」の話とは、その内容は全くこととなつ
ている。

(2) 不與人通者近歲餘後迫衣食且歎乃東遊吳楚間期欲於郡國長史
(古今説海)

不與人通者近歲餘後迫衣食乃東遊吳楚間以干郡國長史
(唐代叢書)

(3) 修覽之驚曰君之才行我知之久矣而君至於此者君平生得無有自恨
乎

(4) イ 於是僕者驅其乘馬挈其囊橐而遠遁去
口 而僕者驅我乘馬衣囊悉逃去

(5) 君久饑某有餘馬一疋留以為贈如何虎曰食吾故人之俊乘何異傷吾
故人乎願無及此修曰食籃中有羊肉數斤留以為贈可乎曰吾方與故
人道舊未暇食也君去則留之

東峯亭同劉太直各賦一物得垂洞藤

寒澗流不息 古藤終日垂

迎風仍未定 拂水更相宜

新花與舊葉 惟有幽人知

喜陸侍御破石埭草寇東峯亭賦詩

古寺東峯上 登臨興有餘

同觀白簡使 新報赤蘆書

幾處聞綠嶽 千方慶里間

欣欣夏木長 寂寂晚煙徐

戰罷言歸馬 還師賦出車

因知越范蠡 湖海意如何

執筆者紹介

目加田 誠

九州大学 名誉教授

浜 一衛

早稻田大学文学部 教授

岡村 繁

九州大学 名誉教授

矢嶋 徹輔

九州大谷短期大学 助教授

由元 由美子

九州大学文学部 大学院博士課程

劉 三富

九州大学文学部 大学院博士課程

小西 昇

福岡教育大学 教授

上尾 龍介

九州大学教養部 助教授

合山 究

九州大学教養部 助教授

麦生 登美江

九州大学文学部 大学院博士課程

山田 敬三

九州大学教養部 助教授

秋吉 久紀夫

近畿大学第二工学部 教授

中屋敷 宏

筑紫女学園短期大学 助教授

安東 俊六

岐阜大学教育学部 助教授

林田 慎之助

九州大学文学部 助教授